

参加者

- ・熊坂(校長)・関(副校長)・棚橋(定・教頭)
 - ・加藤麻里子(PTA会長)・新開 よしみ(東京家政学院大学教授)
 - ・西野 雄二(津久井生涯学習センター所長)・山崎 真理(小山中学校校長)・加藤麻里子(PTA会長)
- 事務局(記録): 林

1. 会長挨拶

副校長(司会) それでは校長挨拶をお願いいたします。

校長: 今年度は3回実施します。5月から第5類への移行に伴い、生徒も徐々に明るくなっています。顔ぶれ、委員の方の入れ替わりがありましたので後ほどご紹介いたします。2名の方が退任され、新開様をお迎えしました。人数をこじんまりさせていただきました。機動力を高めようと考えております。

2. 委員紹介

副校長: 委員の皆様は自己紹介をお願いいたします。

加藤: PTAの会長を務めさせていただいております。CSは2年目となります。どうぞよろしくおが

山崎: 小山中学校の山崎です。相模原市もCSが開始。全校の予定でしたが、3校のみ先行実施させていただくことになりました。小山中もその一つになりました。

西野: 津久井生涯学習センターの西野です。今年もいろいろに視点で見たり学んだりしたいと思っております。

新開: 児童学科9年目になりました。保育士や教員等の養成に携わっています。本学に津久井高校の生徒さんにきていただき、交流させていただきました。どうぞよろしくをお願いいたします。

熊坂: 7年目になりました。ながければ良いと思っておはおりませんので、毎年心機一転頑張っております。

棚橋: 今年、共闘として赴任しました。定時制は初めての勤務となります。よろしくをお願いいたします。

林: 事務局を担当しております。本日は、福祉のデジタル実習室をご利用いただいております。どうぞよろしくをお願いいたします。

副校長: 今年度から副校長として赴任いたしました。関です。前年度までは定時制の教頭をしていただきましたどうぞよろしくをお願いいたします。

(議事)

- ・令和5年度学校評価報告書目標設定について(令和5年度学校要覧参照)

校長: 議事1について令和5年学校評価報告書をご説明いたします。学校要覧をご覧ください。

7ページ今年度、8ページに昨年度の内容がございます。ポイントのみピックアップしてご説明します。

5つの視点で作成されています。今年度このような視点で、観点で取り組んで参りますという表になります。進路・指導支援をご覧ください。3行目に「地域探究の活動を通して、地域の課題解決に取り組み、地域に対する理解を深め、進路実現につなげられるように支援する」「福祉の学びを生かして地域の行事に積極的に参加する交流をする」この2つが本校に与えられた最大の使命になると考えています。昨年

度からいかなの地域と密着した活動ができるか取り組んで参りました。

地域等との交流の「探究活動に対してルーブリック評価を導入し、指導と評価の一体化を図る」これは本校独自の取り組みになっています。ルーブリック評価について中学校ではどうですか？

山崎：あまりすすんでいません。

新開：すべてに示すようにと今年度から言われています。

校長：ルーブリック評価の説明を簡単にさせていただきます。各活動の段階に応じて達成させたい目的に対してどれだけ到達できたか評価していきます。本校でも全く初めての試みになっております。

昨年度の振り返り 8・9 ページになります。「探究指導が教科横断として地域を知り、地域と関わる機会を提供する」という点では課題として積み残しがある。地域等の協働「生徒のアウトプットの機会の充実や進路実現に繋げていくことが求められる。」このような課題があります。

続いて定時制のほうのご報告をいたします。32 ページ 進路指導・支援の具体的な方策。全日制とは切り口が違う。定時制は夜間になりますので昼間の交流はできない。

相模原サポート支援センター（橋本）は就労のサポートをしてもらっています。同窓生が地元で創業してられる方が講和などで交流させていただいている。

33・34 ページ 2 点 2 番目「生徒支援の改善方策等企業人講和等の職業研究に資する行動の拡充をはかる」「生徒の自発的活動を促す仕掛け作り」などを考えている。なかなか主体的な取り組みや自分自身の進路実現に様々な取り組みを生かしきれていない現状がある。

副校長（司会）：今、ご説明したことにこだわらずにお話いただけるとうれしいと思います。

加藤：今年度は地域とは取り組む内容は決まっていますか？

校長：4 月にも大きなイベントを行っています。このあと部会設置でお話させていただいております。

西野：5 つの柱は 2 割程度ずつの重みなのか「地域探究」については少し比重が高いのか。

熊坂：総合的な探究の時間は授業ではなく時間なので、それぞれの学校の特性によって行っていく。これがうまく進んでいくと地域等と進路支援にも良い影響を与えていくと考えています。

・本年度の活動方針について

熊坂：全公立展がございました。その際にお配りした資料です。

ほぼ、すべての入試は面接が入っていましたが、面接を実施しなくてもいい。特色検査の中で面接をするなら 5 教科のテストをしなくてもいい。本校は 3 教科にします。先週、すべての学校の内容は発表された。特色検査として面接をする学校はほとんどありませんでしたが、本校は実施します。

アドミッションポリシーはすべての県立高校が掲げている。それを踏まえた内容の特色検査を行いたいと思います。

（一部省略）

（動画の視聴）

①NHK 首都圏ネットワーク放映「地震峠（本校生徒の漫画研究部が地震峠を伝えるための漫画を作成）」

②福祉科生徒がステージ発表、誘導ボラ等に参加した「三ヶ木春の敬老祭りの様子」

副校長（司会）：動画をご覧になった感想などどうですか？

林：敬老会の体操やゲームは生徒が一生懸命考えた内容です。うまくいかないこともありましたが、地域

のみなさんととても喜んでおられました。

・部会設置等について

熊坂：実はこれから投げかけさせていただきたいメインのテーマになるのですが、部会設置ということで、今ご覧いただいた取り組みのような形で、生徒が地域へ 地域から学校につながりを強めていく場面が増えつつあるが、外部から声掛けをいただいた形でやっている。今後はこのような地元の人との共同の場面をこのCSから仕掛けていきたいと考えている。

実は、外部から声掛けをいただいた形でやっている。協働の場面をCSから仕掛けていきたいという話本来は、下部組織として部会がぶら下がっています。地域連携部会と生徒サポート部会があったのだがコロナで活動の展開ができなかった。

今回は、新開さんの東京家政学院大学と本校は3年前に高大連携を行っており、昨年度から新入生のオリエンテーションなどにご協力いただいている。

今後は、東京家政学院大学の学生と高校生がコラボしてこの地域で何かできないか考えていければいいなど考えている。

イベントなのか何の形なのかわからないが、地域の機関やPTAや中学生、高校生、大学生も参加できないだろうか。それを動かしていく運営部会として地域連携・生徒サポート部会として動き出していく、発信していくことがCSの本来の役割であると考えている。

具体的にはっきりとしたイメージしかないが、思いつくままお話していただいて取り組んでいく（アイデアは煮詰めていって1つでも来年度でも実現できればいい）ことを期待している。

副会長（司会）：今の話、部会の活動として考えられることのご意見いただければと思います。

熊坂：ひとつ私が勝手に考えているのは「地域探求」の中でひとつ授業を立ててそれを軸にやっていくことができたらと思う。タイトルイメージは「Enjoy with university student in TSUKUI～大学生のお兄さん、お姉さんと一緒に津久井を遊び倒そう～」です。その中に集まってくる生徒がいれば、その中で生徒が考えてテーマを決めていくのはどうかと考えている。

副校長（司会）：加藤会長いかがですか

会長：昨年は、PTAも活動できなかったけれど、同窓会長と話をする機会があって、同窓会はベンチ作成をした話があったが、そういう活動にも参加していきたくし、支援していきたい。

コロナ前は地域との交流活動ではどのようなものがあったのですか？

熊坂：これまでは一方方向で生徒の参加が多かった。地域の文化祭や敬老春祭り、湖上祭、津久井湖のイルミネーションなどへの参加など、声がかかって出ていきました。1回だけ福祉科が企画した「桜を見る会」がコロナで一斉休校してしまい幻の企画になってしまった。桜の木の下で地域の郷土料理を作る団体と料理をして地域の高齢者に振る舞う予定だった。定時制は畑の収穫物を近隣の老人ホームに届けたり、津久井支援学校にも届けに行っていた。コロナ前は、中央小学校の1年生と落花生握りもしていた。

副校長（司会）：新開さん、本校の生徒と大学生が一緒になにかやれる機会はあるのでしょうか？

新開：森の幼稚園というのをやっていて定期的に高校生がやってくるので、今我々がやっていることに参加していただくことについてはイメージが湧くのだが、大学も実習や試験のためのカリキュラムがたくさんあるので時間的に厳しい側面もある。高校生が自分たちで考えて主体的に動いていく活動は、現在求められている力だと思うので、生徒さんが大学というフィールドを使ってやりたいと思うことを中

心に考えていきたい。幼稚園の活動をしている学生は、校内ではなく津久井を遊ぶフィールドとして新たな展開をしていくことも面白いと思う。

副校長（司会）：西野さんそういった場合には場所をお借りすることなどご協力もお願いできますか？

西野：そうですね。

副校長（司会）：山崎先生いかがですか

山崎：まとまらない話でもよろしいですか。熊坂校長の地域に対する発信をすごく尊敬しているコロナ前とコロナ後変化したこととして吹奏楽部の演奏の機会がストップした時に彼らに発表の機会を与えてくれた。地域の方向けの少年院の設置に向けた地域住民説明会の後に披露の機会をいただいた。医療少年院の取り壊し壁に落書きを懸念して、子供たちが絵を描くことの提案をいただいた。法務省とちゃんとコラボすることになった。オンラインで子どもたちと打ち合わせをした。「少年院とはどういうところ？つながりのあるところ」などテーマを考えて取り組むようになった。デザイン事務所も入った。いろんなつながりができた。どんどんつながりができた。その少年院の跡地にたんぼぼ（絶滅危惧種）が生息しており、横浜国大の先生と一緒に保存する取り組みに関わることができた。

昨年度は津久井高校の総合的な探究の時間で鉛筆を集めるプロジェクトが生まれた。1つの話から枝分かれして。職員がおもしろいじゃんと思出した。教科のカリキュラムマネジメントに変化が生じて生きた。生徒が自分たちで考えるようになってきた。いろんな方が、いろいろ関わってくれるので大きく広がっているけれどもちょっと様子をみながら放っておこうと思っている。

林：今、山崎校長の「ちょっと放っておこう」というのがこの部会には大切要素であり、ここにいるメンバーが一から十までの働きかけをするのではなく、生徒や大学生と一緒に考えている様子を見守り、本人たちが困った時に、様々な提案をしたり、機関との仲介をしていくような役割があります。動き出すまで「放っておく」スタンスが重要になります。同窓会のベンチづくりも生徒からベンチの補修の要望ができたことがきっかけです。ベンチを修理するお金はないから、同窓会には木材展店の社長もいるし、掛け合ってみれば、同窓会総会でプレゼンする時間をあげるところからスタートして、生徒会生徒が中心になってプリントを作り、パワーポイントでプレゼンしたところ、賛同を得て、同窓会の全面協力いただき、みんなで思い出作りをするイベントにまで広がっていった。生徒の「やりたい」を応援する部会でありたい。このことを通して生徒は大人と話をする、交渉する経験もできるし、形にすることの満足感や自信も得られると思う。

山崎：それを面白がってあげられる人たちでいたいと思う。

生徒からあいさつ運動を素敵にしたいから協力をしてください。風船でアーチを作りたい、それを挨拶運動だとして花フェスとしてやりたい。先生が知恵を授けて、風船ぐらいなら買ってもらえるかもしれないから校長先生に交渉してきた。さらに完成品を持って小学校にも行きたいとのこと許可したところ、子供たちが自分たちで担いで小学校に20分歩いていった姿を素敵だなと思った。教員はそれを面白がって見守っていた。そういうことが大切なのかと思った。

副校長（司会）：良いお話ですね。

会長：PTAもいろんなことに支援していきたいと思っている。

副校長（司会）：そろそろお時間になりましたがいかがですか。

校長：メールや情報交換をどんどん行っていきたいと思います。

まだまだ話の続きをしたいところですが、われわれもこの活動を楽しんでいきたいなと思っております。